旧李王家東京邸内の武石弘三郎作大理石浮彫について

高 晟埈

本稿は、2011年5月12日に行った、旧李王家東京邸の玄関間に所在する武石弘三郎作の大理石浮彫の調査の結果を簡単にまとめたもので、これからの研究のための基礎資料を提供しようとするものである。

武石弘三郎（1877-1963年）は、新潟県南蒲原郡中之島村（現・長岡市）生まれ。兄・武石貞松と堀口大学の父・堀口九萬一が同じ長岡の私塾・誠意塾に通っていたこともあり、堀口家とは家族ぐるみの付き合いとなる[1]。1896年、東京美術学校の予備課程・乙種に入学、翌年彫刻科に進級し木彫を専攻する。また、高村光太郎、白井雨山、渡辺長男らと「青年彫塑会」を結成。1899年、木彫科から新設の塑造科に転じ、長沼守敬に師事。1901年には塑造科の第一回生として美術学校を卒業。東京では堀口家に寄寓していた。同年、留学先にベルギーを選び、翌年ブリュッセルの王立美術学校に合格し入学。留学に際しては、堀口九萬一が当時在ベルギーおよびオランダの公使館にいたため、大きな力となった。1906年には、学校内のコンクールで優勝し、一年間単独の研究室を与えられる。1907年から藤島武二らとヨーロッパ諸国を旅行して著名な美術作品に接する[2]。1909年に帰国し、労働者を多く題材としたコンスタンタン・ムーニエを日本に紹介。1911年には、文展に滞欧作《婦人像》（神奈川県立近代美術館蔵）を出品。1914年には、帰国時より懇意としていた森鷗外の像を完成。その他にも、大倉喜八郎や桂太郎、渋沢栄一、人見絹代、乃木希典、山本五十六ら著名人の肖像を数多く手がけた。新潟県立近代美術館・万代島美術館でも、第11回文展出品作の《母》（1917年）を所蔵している[3]。

旧李王家東京邸は、朝鮮王朝最後の皇太子で日本に在住した李垠（1897-1970年）の東京本邸で、宮内省内匠寮の北村耕三や鈴木鎮雄、権藤要吉らによって設計され、清水組（現・清水建設）の施工により1930年に竣工した。戦後は西武鉄道に売却され、1955年には赤坂プリンスホテルとして開業し、丹下健三設計の新館が開館して以降は、同ホテルの旧館として婚礼施設やレストランとしての機能を果たしてきた[4]。

この旧李王家東京邸にある武石弘三郎作の大理石浮彫の存在は、新潟県立近代美術館の美術鑑賞講座「新潟の洋画と彫刻（戦前を中心に）」の準備のために閲覧していた武石の伝記に付録として掲載されている「資料・武石弘三郎作品年表」において知り得たものである[5]。他方で、美術館連絡協議会を中心として展覧会「朝鮮を愛した美術家たち」（仮称）の開催に向けた研究会を続けて来ており、今回の調査はその研究会としても有意義なものということで、神奈川県立近代美術館の李美那学芸員も同行した[6]。

赤坂プリンスホテル（のち、グランドプリンスホテル赤坂と改称）は、2011年の3月31日で営業を終了し、調査のために訪問した5月12日の段階では、本館部分は東日本大震災の避難所として使用されており、旧館の旧李王家東京邸は閉館中の状態であった。プリンスホテルによると、旧李王家東京邸内の美術品を含む動産は全てプリンスホテル本体が引き揚げて保管しているが[7]、武石の浮彫は建物と一体であるため、不動産を管理しているグループ会社である株式会社西武プロパティーズが管理とのことで、当日は同社チームマネージャーである篠塚正博氏の立会いのもとで調査を行うことができた。篠塚氏によると、この建物はいずれジャッキアップして位置を若干ずらした上で保存する予定で、東京都指定文化財としての指定を受けるために東京都教育委員会と協議中とのことであった[8]。

武石の大理石浮彫（図1, 2）は、玄関左側に設置されており、縦88.6㎝、横197.7㎝、深

1
堀口大学とのこのような関連性から、2002年に新潟県民会館ギャラリーで開催した「詩人・堀口大学と美の世界」展では、武石の《婦人像》（神奈川県立近代美術館蔵）を出品している。平石昌子(編)『詩人・堀口大学と美の世界』長岡：新潟県立近代美術館，2002年，fig.I-28.

2
この際に藤島武二が武石弘三郎を描いた油彩作品《T氏肖像》（1909年）が神奈川県立近代美術館の所蔵となっている。

3
武石の伝記については次を参照。佐々木嘉朗『彫塑家・武石弘三郎ノート』新潟：北日本美術，1985年。

4
株式会社西武プロパティーズによるプレスリリース「旧李王家東京邸見学会について」（2011年8月5日付）より。

5
佐々木嘉朗前掲書 pp,248-271.

6
研究会はこれまで7回開催。第1回：2010年4月18日／美術館連絡協議会事務局、第2回：2010年8月16-18日／神奈川県立近代美術館・葉山、第3回：2010年10月27-29日／兵庫県立美術館、第4回：2011年1月21-23日／新潟県立近代美術館、第5回：2011年4月18-20日／ソウル・金鍾瑛美術館、第6回：2011年5月12日／美術館連絡協議会事務局、第7回：2011年10月1-2日／横須賀美術館。研究会メンバーは、井内佳津恵（北海道立旭川美術館）、金惠信（学習院大学）、李美那（神奈川県立近代美術館）、冨田康子（横須賀美術館）、ラワンチャイクン寿子（福岡アジア美術館）、高晟埈（新潟県立近代美術館）。

7
朝鮮美術展覧会出品作も含まれているという話もあり、このコレクションの詳細な調査研究が期待される。

8
その後2011年6月9日、「東京都指定有形文化財（建造物）」の指定を受けている。プレスリリース「旧李王家東京邸見学会について」（2011年8月5日付）より。

図１　旧李王家東京邸 玄関間

図２　武石弘三郎作浮彫 全図

図３　武石弘三郎 サイン

さ 11.0㎝の大規模なものである。『彫塑家・武石弘三郎ノート』によると 1932 年に李王家に納品となっているが[9]、サインには、K. TAKEISHI 1930 とある（図 3）。ここに表されているのは、古代ローマの石棺やポンペイ壁画に見られるような、花綱を手にして遊ぶ 9 人の

9
佐々木嘉朗前掲書 pp,196-197, 263.

図 4　武石弘三郎作浮彫 部分図

クピドたちであるが、ある特定の神話場面を表したものと考えられるようなモティーフは見られず、全体として豊穣のシンボル、転じて子孫繁栄の象徴として捉えることが妥当であろう。こうした表現はベルギー王立美術アカデミー留学時に学んだ新古典主義的なレパートリーを応用したものと考えられる。

また、クピドたちの容貌を詳細に観察してみると、西洋人の男児というよりも、むしろ東洋人のそれであり、あるいは大人の容貌と観察できるものもある（図 4）。ここから、このクピドたちにはどうやら特定のモデルがいたのではないかとの推測も可能になってくる[10]。具体的には、この邸宅の住人であった李垠とその妃･梨本宮方子、長男の李晋（1921 年生まれ。1 歳で夭折。毒殺説あり）、次男の李玖の可能性がまずは考えられよう。しかし、李玖は 1931 年生まれであるため、この推測が蓋然性を持つためには、武石のサイン通り 1930 年の制作ではなく、『彫塑家・武石弘三郎ノート』にある 1932 年の制作である必要があるが、以下の通り、結果として 1930 年が正しいという証拠を得ることができた。

本作品の調査後の 5 月 26 日、東京都教育庁文化財保護係において旧李王家東京邸の建築図面や竣工写真を調査した李美那氏によると、1930 年 3 月 2 日撮影の竣工写真にはすでにこの作品が設置されて写っているとのことであった。竣工写真帳は宮内庁書陵部所蔵の資料で、カラー写真が貼り付けてあり、各写真に番号と日付がスタンプできっちり印されているので、後から追加したとは思えず、つまりは 1930 年 3 月 3 日の引っ越しの日には、この玄関間に設置されていたことは確実であると、李美那氏は推察している[11]。

1930 年にはすでに作品が完成しているという証拠写真がある以上、1931 年生まれの李玖が描きこまれているという可能性はなくなったが、そもそも毒殺のうわさもあった長男の李晋を登場させることが果たして大玄関の浮彫としてふさわしいかという李美那氏の疑問もある[12]。

もう一つ、あくまでも一つの可能性としてであるが、この頃武石の長女の萬里子は立て続けに 4 人の子供を出産しており、みずからにもたらされた一連の慶事を形にすべく作品に

10
この可能性を最初に指摘したのは李美那氏である。

11
2011 年 5 月 27 日付の李美那氏からの筆者への私信より。東京都教育庁文化財保護係では、鈴木徳子学芸員が調査の便宜を図って下さったとのことである。この際の李美那氏の調査では、図面が引かれた時期などから、発注は 1928 年にはなされていた可能性があると判明。土地の下賜は 1924 年、建築費を下賜金として渡されたのが 1926 年、さらに 1926 年の新聞には「着工」と記事が出ており、建築内部の装飾等は 1928 年にはほぼ発注されていたようである。

12
2011 年 5 月 27 日付私信より。

孫たちを登場させ、やはりこれから子孫に恵まれるべき李王家へのはなむけとしたということは考えられないだろうか。1925年には、陸軍軍医であった田中巌と結婚した萬里子とのあいだに、武石にとっては初孫となる長男の力が生まれ、1927年には次男の信が、さらに1929年には朝鮮・大邱において女子の双生児である昭子と和子が生まれている。ちょうどこの頃、田中巌は大邱の陸軍衛生病院に副院長格として勤務しており、萬里子たち家族は朝鮮在住であった[13]。

武石の朝鮮との関わりは、京城青葉町（現・ソウル市龍山区トルモルギル）の善隣商業学校（現・善隣インターネット高校）構内に設置される予定であった、やはり新潟出身の実業家・大倉喜八郎の肖像（1927年完成）を制作したということからすでにあり、さらに朝鮮軍司令官の南次郎大将（1936年より朝鮮総督）とは旧知の関係であった。実際、李王家邸の浮彫を完成させた1930年の秋には、武石は妻と共に朝鮮を訪問し、娘一家を訪ねて大邱に行ったほか、慶州を回って同地の古美術を見学している。さらに京城で南次郎と旧交を温めている[14]。この1930年の武石の朝鮮訪問は、もしかすると李垠や南次郎の勧めがあったからであろうが、もし浮彫作品の完成後に武石が李王家邸に招待されていたならば、宮内省あるいは李王家から感謝状を受領している可能性もある。

ところで、そもそも武石弘三郎が李王家東京邸の浮彫を受注するきっかけは何だったのだろうか。朝鮮との関わりを考えるならば、南次郎の関与はもしかしたらあったであろう。この点に関し李美那氏は、この南次郎の関与の蓋然性を認めながらも、もう一つ、李王家邸の施工に携わった清水組に大きな影響力を持っていたということから、渋沢栄一の関与を指摘している[15]。実際、武石は1916年に渋沢栄一の喜寿祝いの銅像を手がけており、渋沢が武石のアトリエを訪問した写真も残り、武石の伝記を記した佐々木氏はこのアトリエ訪問について、「この製作を機として交わされた話題の中に、15年前両者が文字通りすれ違っていたブリュッセルの想い出が加わっていたであろうことは、十分想像できることである」と述べている[16]。こうした渋沢と武石の関係を考えるならば、渋沢の影響力は確かにあったであろう。ただ、武石は森鷗外ら影響力があった文化人とも親しく、また日本の政財界の主要人物の銅像を一手に引き受けていたため、武石を李王家邸の浮彫の作者として推薦した人物がそのいずれであれ不思議はない。

以上、簡単ではあるが、旧李王家東京邸の武石弘三郎作の浮彫彫刻の概略を述べてきた。この作品の図像面の源泉は何であったか、正確な主題は何であったか、特定の人物が表されているとすればそれは誰なのか、さらには李王家と武石を結びつけるきっかけは何であったかは、いずれも現段階では推測にとどまっている。今後のさらなる調査研究を期待したい。

（新潟県立近代美術館 主任学芸員）

13
佐々木嘉朗前掲書 pp.179-191.

14
佐々木嘉朗前掲書 pp.191-193.

15
2011年5月27日付私信より。

16
佐々木嘉朗前掲書 pp.149-150.

TAKEISHI Kôzaburô's Marble Relief in the Former Residence of LEE Eun in Tokyo

KO Seong-Jun

The aim of this article is to summarize the results of fieldwork carried out on May 12, 2011 upon the marble relief made by Takeishi Kôzaburô hung on the left wall of entrance way of the of former Tokyo residence of Lee Eun.

Takeishi Kôzaburô (*b*.1877 in Nagaoka, *d*.1963 in Kamakura) was the first student of the carving course of the sculpture department of Tokyo Fine Arts School, and from 1901, he studied at *L'académie royale des beaux-arts* in Brussels.

The Lee residence was constructed in 1930 as a residence of Lee Eun (*b*.1897 in Seoul, *d*.1970 in Seoul), the last crown prince of the Korean Lee dynasty, who lived in Tokyo. The building was used as a facility of the Akasaka Prince Hotel after World War II until March 2011, and is now designated as a tangible cultural property by the Tokyo Metropolitan Government. Takeishi's relief is comparatively large (*h*.88.6cm, *w*.197.7cm, *d*.11.0cm), and signed "K. TAKEISHI 1930." On the relief are depicted nine putti or amorini playing with garlands, which could be considered a symbol of fertility or prosperity as a whole.

Upon closer observation, it is possible that the faces of the putti or amorini had specific models. It is plausible that the models are Lee Eun and his wife LEE Bang-Ja (princess NASHIMOTO Masako), and his sons LEE Jin and LEE Gu, but there is no clear evidence for identification. It is not yet known who commissioned the order for a relief to Takeishi, but there are two possibilities: MINAMI Jirô, an old friend of Takeishi who would become the Governor General of Korea, and industrialist SHIBUSAWA Eiichi, who had a strong influence on Shimizu-gumi, which was involved in the construction of the residence.

(Assistant Curator, The Niigata Prefectural Museum of Modern Art)